

痛みを負う現場に働く力

野宿する人たちの支援を

名古屋で野宿者支援の会を立ち上げて10年。

聖霊が主イエスの言葉と働きを思い出させてくださり
筆者を励まし導いてきた。

東岡牧

ひがしおか まき／野宿者を支援する会代表

「訪問看護ステーションなみ」訪問看護師

愛知日本聖公会名古屋聖ステパノ教会員

その人に合うものを手渡して

「こんにちはー 昼回りです。お体の調子はどうですか」。高架下の小屋に野宿している人に呼びかけます。すると「ほーい、元気だよー」と声がして小屋から出てきてくれます。

私たち「野宿者を支援する会」は毎週木曜日に場所を決めて、名古屋の河川敷

や高架下、公園などに野宿する人を昼間巡回しています。30年ほど前は日雇い労働をしながら野宿する人が多く、夜しか会えないので夜回りをしていました。しかし、今は日雇い労働も少なく、名古屋で野宿する人の8割はアルミ缶回収をしています。回収したアルミ缶をつぶす作業を昼間にしているのです、昼に巡回した方が野宿する人に会え、じっくり時間を

かけていろいろな話ができます。

フードバンクを行う「セカンドハーベスト名古屋」から頂いた食糧と、夏は凍らせた飲み物、塩あめ、清涼飲料水を、冬はカイロ、毛布などを配ります。私は看護師なので血圧測定などの健康チェックや、必要があれば生活相談もします。活動を始めて10年がたとうとしていますが、最初は「何しに来た？」と不信がられていましたが、少しずつ打ち解けてくれるようになりました。腰痛や胆石症を患ったことのある人、血圧が高い人、その人に合った物を渡し、その人に合った声かけをしています。

野宿が嫌になった人には生活保護の説明をしますが、それ以外は無理に福祉事務所や病院へ連れて行くことはしません。時々「あんまり無理しないでね。ちゃんと国が保障してくれるから」と伝えます。野宿をする人たちの背景はさまざまです。大きな川のほとりに住む中山さんはアルミ缶回収をしながら畑仕事をしています。私たちが訪ねる日は採れたての野菜をかごいっぱい詰めて「持って行ってくれー」と待っていてくれます。

その代わり貧血気味の中山さんには栄養ジュースとお米を渡します。「物々交換する江戸時代みたいだね」とみんなで笑います。

実は中山さんは多額の借金をして買った船を、東日本大震災の津波で流されてしまいました。借金を返すために7年間、昼も夜も働き続け、返し終えたときには放心状態で何もできなくなり、名古屋まで来て野宿になりました。まだ、心の傷は癒やされませんが、私たちはとても仲良くなりました。「何かあったらすぐに私たちに言っただけ」と約束しています。

イエスの言葉のとおり

私がこの活動をするようになったのは両親の影響が大きいです。父が部落解放運動をしていたので、幼いころから家には差別された人や相談にのってもらいたい人がいつも集まっていました。その姿に「困っている人がいたら助ける」のを当たり前として育ちました。1980年に母がくも膜下出血になったとき、高校生の私が看病しました。その経験から、人のお世話をする事に向いているとわかり、看護師になりました。

そして、海外で貧しい人たちのために働きたいと海外医療を目指しました。しかし1987年、友達が大阪の釜ヶ崎に連れて行ってくれました。その街では多くの人々が野宿し、時にはそのまま路上で死んでしまう。「これは海外へ行っている場合ではないな」と日本で活動することを決意したのです。

聖書の中でイエスさまは弱く、小さくされた人たちを訪ねて一緒に食事をし、平和を呼びかけていました。良きサマリヤ人は、倒れている人を介抱し宿屋へ連れて行きます(ルカ10・25以下)。もしイエスさまが今生きていたら、こんなふうには巡回したのではないかと思います。

先日、巡回中に公園で倒れている野宿者を見つけました。足にけがをしていたので、その場で足を洗い、処置をし、話をしてから福祉事務所へ連れて行き、生活保護の申請をすると、一時保護所へ入ることができました。「行って、あなたも同じようにしなさい」(ルカ10・37)のとおり、神さまの教えに従い、イエスさまのお手伝いのできたのではないかと、とてもうれしかったです。



用意してくれたケーキと一緒に。
筆者右

活動をしていると、このようなことがあります。「聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる」(ヨハネ14・26)とイエスさまが弟子たちに告げたように、聖霊が私をなすべきことへと導いてくれるのです。

そこにイエスがおられる

小さな川辺の小屋に谷口さんという人が住んでいました。私たちが訪ねると笑いながら小屋から出てきてくれます。無口ですが野球の話になると、中日ドラゴンズの話を熱く語ってくれました。2015年のある日、谷口さんを訪ねると返事がありません。恐る恐る小屋をのぞくと谷口さんは亡くなっていて、人の形をしておられませんでした。

「なぜ、もっと早く見つけてあげられなかったのか」と自分を責めました。精神的に不安定になり、小さな川を見ると後ろから黒い影がざわざわと現れ、体が震えました。神さまに助けてもらおうと聖書を読んだとき、「最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたこ

となのである」(マタイ25・40)の箇所が出てきました。一般にこの箇所は「弱った人に親切にしたのは神さまにしたこと」という解説だと思えます。

しかしこのとき、あのドロドロになってしまった谷口さんは、私たちの罪のために十字架にかかったイエスさまの姿だと私は思いました。「私の罪がイエスさまを十字架にかけた」ことを実感したのです。実際の十字架上のイエスさまは絵に描けるようなものではなく、眼を背けたくなる場面のはずです。ごめんなさい谷口さん。ごめんなさいイエスさま。

それからは野宿している人への声かけが変わりました。「野宿していてもいいから、とにかく生きていて!」「必ず、生きていて!」「大げさだなあ、牧ネエは!」と笑われますが、本当に生きづらい環境の中でがんばっている人たちが、安心して暮らせる社会を作っていかなければ、と強く願っています。

ある公園に、とてもよく働く佐藤さんという人が野宿しています。アルミ缶回収をしながら夜は割烹料理店でアルバイトをしてお金をためています。元々腕の

いい板前さんだったらしく、料理長にかわいがられ、1年後には住み込みで店を切り盛りしてもらいたいと言われていたようです。「俺、もうすぐ野宿じゃなくなるんだ」とうれしそうに話していたのが2019年の冬でした。

それから新型コロナウイルスの感染が拡大し、店は閉店に追い込まれ、住み込みの話も仕事もなくなっていました。心配して佐藤さんを訪ねると「コロナは人の命を奪うだけではなく、俺たちの夢や希望も奪ってしまうんだ」と肩を落として小さくつぶやきました。何と声をかけていいかわかりませんが、「佐藤さんとにかく、生きていて」と言うのが苦笑いしていました。

今夜も炊き出しの列にイエスさまが並んでいる気がします。「行って、あなたも同じようにしなさい」と私の背中を押してくれそうです。調子にのつてるときはガツンと説教し、くじけそうなときは私を背負って共に歩いてくれています。

今もつらい状況にある野宿している人たちと、それを支える支援者のために皆さま共にお祈りください。 Ω